

# 75周年を迎えた日本地質学会

明治(1893年)に創立された日本地質学会は昭和43年(1968)4月1日75周年を迎えた。その長い歴史の間いくつかの学会を生み出して来、ここに今日を迎えたわけだが、この日のために関係者は昭和41年の9月頃から準備を進めてきた。その計画としては募金・記念出版・記念式典・記念講演・討論会・見学旅行・表彰・祝賀会等分担して作業をすすめた。

現在日本地質学会の会員数約2,500名であり心配されていたこの事業のための募金も最終的には目標額に達したものと見られ、会員各位の熱意と協賛の関係各機関のご好意による所が大きい。

記念事業の1つである出版については、まず日本の地質学の現状と将来の展望をまとめた「日本の地質学」と地質調査所の地質図をもととした「記念地質図」がある。前者は中堅の研究者によって各分野ごとにまとめられたもので600頁余りの大部となり、わが国の地質学関連分野の動きをよく把握することができる。

第1日の4月1日は会場を自らの椿山荘にもうけ、記念式典が催された。会長挨拶の後、文部大臣(代理)・科学技術庁長官(代理)・日本学術会議議長・工業技術院長(代理)・関連学会長(日本古生物学会長)の祝辞があり、ついで表彰式にうつった。この表彰・感謝状の授与・贈呈は多年地質学界につくしてこられた、いわば陰の功労者と協力者にたいして重点的に行なわれたもので、まことに美しい行事であった。

表彰者29名のうち、地質調査所関係者は8名をかぞえ、和田義一郎(勤続55年)・高崎健一(46年)・草深源三郎(44年)・石川七右衛門(40年)・小宮利夫(39年)・小林竹雄(29年)・大野正一(27年)・谷津良太郎(26年)の諸氏が感謝状をうけた。さらに側面にあって学界に協力された3社(岩本商会・大久保書店・双文社)も感謝状を贈られた。

午後からは記念講演に移ったがその題目は次のとおりである。

四国地質構造に関する若干の問題 矢部 長克  
高温型および低温型斜長石の光学的識別について 坪井誠太郎  
地質調査事業の動向 佐藤光之助  
地質学の現状 渡辺 武男

徳永重元・水野篤行

矢部博士は黒瀬川地帯地質構造を中心としてご自身の考察にもとづく三波川変成の時期、さらに四国外帯の分帯あるいはその後の第三系の堆積までにおよぶきわめて広い話題についてのご見解を示された。

坪井博士は低温型および高温型斜長石を中心としての岩石顕微鏡的研究の変せん、およびその岩石成因の問題を深い内容をもって説かれた。

佐藤地質調査所長は地質調査事業が最近とくに変化しつつあること、今後地球内部に対する国際的開発研究、実験地質学の発展、海洋地質学の発展等がみこまれることなどを説かれた。

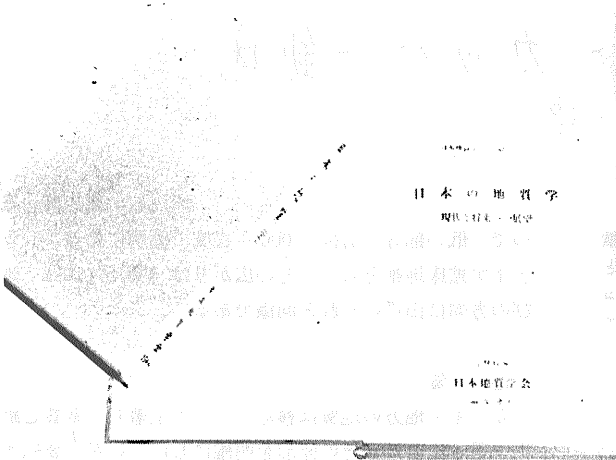
渡辺博士はLyell以来の地質学研究の推移、とくに個人から協同の研究へと場がうつりつつあることを指摘された。その後「富士の間」で庭園の今や盛りの桜花をながめつつ祝賀会が開かれたが、この学会の75年の長い歴史を示すかのように、今回名与会員に選ばれた大橋良一博士のご挨拶に始まり、学会賞をうけられた藤原隆代・加納博両博士、さらに若いところでは学会奨励賞をうけられた方々の挨拶があった。また最後には今年10月に講演会のある清水の東海大学の学生諸君による元気のよいフィナーレで幕を閉じたが、さいわい天候にも恵まれ、会員一同共に祝う日が盛況裡に終わったことはまことに幸であった。

第2日目は学術講演にうつり、会場は東大の3会場で主としてシンポジウム形式による討論がすすめられた。

4月2・3日に行なわれた内容は、地向斜堆積物の総合的研究・第四紀地殻変動・同位体岩石学地球化学・鉱物の生成環境・本邦変成帯研究における最近の進歩・環境と生物学等の6つであり、約1000人にのぼる参加者があったと推定される。シンポジウムの終わったのち4日から6日にかけては富士火山の地質・富士火山水理地質・木曾山地古生層・神流川流域の地質・日立鉱山・三浦一房総半島地質・東京都内地盤沈下等の見学旅行が行なわれ、いずれも成功裡に無事終了した。

顧みると長い75年間の地質学会は、地質学界における1つの幹としての役目を果たしてきているし、さらに今後果たしてゆくことと思われ、その枝に葉を茂らせるのは会員各位の熱意によるものと考えられる。

(筆者は石炭課長・地質部)



75周年記念出版物「日本の地質学」



表彰状を渡辺会長よりうける石川七右エ門氏



式典に当って祝辞をのべる日本学術会議議長 朝永振一郎博士



記念講演を行なう佐藤光之助 地質調査所長



表質者に地係関係の式所を記念撮影